〝かぎろひ〟考

和田　萃

はじめに

昭和四十七年（一九七二）に奈良県宇陀郡大宇陀町（現、宇陀市大宇陀）の「かぎろひの丘　万葉公園」で始まった「かぎろひを観る会」は、一昨年（平成二十三年）十二月十一日に四十回を数えるに至った。これまでに私は、平成十五年十二月十日の第三十二回と、一昨年の第四十回に参加している。第三十二回の折には、わずかな間であったが、東の空に「かぎろひ」の立つのが見られた。しかし一昨年は残念ながら、「かぎろひ」らしきものにすぎなかった。大宇陀の人々にうかがうと、地球温暖化により「かぎろひを観る会」の折には、「かぎろひ」が立つことは少なくなったとのこと。むしろ二月初旬の厳寒期に、よく見えるらしい。

私は、平成四年（一九九二）二月に刊行された『新訂　大宇陀町史』の執筆委員でもあったことから、現在に至るまで大宇陀を訪ねることが多い。大宇陀の山野の景観はまことに優れており、推古十九年（六一一）五月五日には、わが国で最初に薬猟が行なわれた地でもあった。また壬申の乱勃発に際して、吉野宮を脱出した大海人皇子らの一行が最初に休息した場所であり、少し後のことになるが天武九年（六八〇）三月二十三日に、天武天皇は草壁皇子を伴って菟田の吾城へ行幸している。

大宇陀は、近世前期には織田藩の城下町であり、後期には天領であったことから、大和でも屈指の繁華な地であった。上新・中新を中心とした町並みは、平成十七年十二月十二日に「宇陀市松山伝統的建造物群保存地区」に指定され、現在に至っている。今も薬業が盛んであり、森野旧薬園（国史跡）も所在している。「かぎろひの丘　万葉公園」からの眺望は素晴らしい。『万葉集』に親しむ人々が四季を問わず、全国から訪ねておられる。

『万葉集』巻一の四五～四九番歌は、万葉集研究では「阿騎野歌」とされ、これまで数多くの研究が行なわれてきた。私は日本古代史の研究者で、吉野の前　登志夫により創刊された「ヤママユ」所属の歌人でもあるが、これまでの阿騎野歌に関する研究成果については暗い。しかし「かぎろひ」についての従来の理解には、少し問題が残されているかと思う。また天武九年三月の菟田の吾城への行幸や、さらに遡って推古十九年五月五日の菟田野での薬猟とも、少し関わりがあるかと考える。

私は奈良県磯城郡田原本町の出身。今も明日香村に隣接する高取町に住み、また古くから大宇陀の地に親しむ者として、改め

て阿騎野歌の歴史的背景や、軽皇子即位に密接に関わる歌として拙い分析を試みる。御批判いただければ幸甚である。

宇陀の風土と歴史的背景

阿騎野歌を分析するに先立ち、まず宇陀の風土や歴史について概観する。

宇陀山地では、西方の大宇陀地域を流れる宇陀川と、東方の菟田野地域を流れる芳野川があって榛原付近で合流し、東に転じて三重県名張市付近で名張川に注ぎ、さらに木津川となって京都府八幡市付近で淀川に合流する。奈良盆地を流れる諸河川は合流して大和川となり、大阪湾へ注ぐのに対し、宇陀地域や東部山間地帯の都祁・山添地域を流れる諸河川は、全て木津川水系に属している。

奈良盆地の東南に位置する宇陀山地は、近代になって鉄道が敷設されるまでは、奈良盆地と伊賀・伊勢との間に広がる要衝の地として、大いに栄えた地域である。奈良盆地と伊賀・伊勢を結ぶ道として、近世には、北から阿保越え伊勢街道、伊勢本街道、東吉野村から高見山の頂上近くを通る高見越えの三道があった。これらの東西の道に対し、南北の道として、宇陀の榛原から北の香酔峠を越えて都祁・山添に至る道があり、また大宇陀からは南の入野峠を越えて、吉野川上流の吉野町入野・窪垣内・国栖に至る入野峠越えと、菟田野から南の佐倉峠を越えて、東吉野村に至る佐倉峠越えの道があった。

こうした交通路を踏まえると、近代以前の宇陀の地は交通の要衝であると共に、各地の情報が集積する地でもあり、まことに枢要の地であった。大和王権が宇陀の地に上県・下県を置いた由縁である。また宇陀の地は湧水の豊富な地で、延喜式内社の宇太水分神社（菟田野古市場）の他に、菟田野上芳野の水分神社、榛原下井足の水分神社、大宇陀平尾の水分神社、室生下田口の水分神社が所在する。全国的にみても、これほど水分神社が数多く所在する所は珍しい。

『古事記』の神武伝承に、弟宇迦斯は「宇陀の水取等が祖なり」とみえ、また『日本書紀』の神武二年二月条にも、弟猾に猛田邑を給わって猛田県主とし、菟田主水部らの遠祖とする。菟田主水部に関わって、宇陀に氷室があったことが注目される。

氷室については、都祁の氷室がよく知られているが、宇陀にも氷室の所在したことが指摘されている（『新訂 大宇陀町史』）。奈良県下で年平均気温が最も低いのは都祁（現在では奈良市都祁町）の針であり、それに次ぐのが大宇陀である。そうした地形条件を活かして、古代には菟田主水部により氷室が作られ、宮廷に氷が納められたとみてよい。

このように古代の宇陀は、交通の要衝であると共に、王権が上県・下県を置いて直接支配した地であり、五世紀代には、山の民である久米集団が居住して集団で狩りを行ない、一端、事があれば、王権中核の武人集団として活躍したと推定される。宇陀地域では、奈良盆地のように巨大な古墳は存在しないが、古墳の発生期から終末期に至るまで、連綿として古墳が築造されており、注目される。記紀の神武伝承が宇陀の地を主舞台としている由縁でもあろう。

さらに注目されるのは、宇陀には水銀鉱床が所在することである。水銀は常温で液体をなす唯一の金属元素であり、金や銀とも容易に混じり合い、金属面に金メッキや銀メッキを施すことが出来る。そのため水銀は、古代においては金や銀よりもはるかに高価なものであった。

紀伊半島を東西に横断する中央構造線に沿って、高見山の麓から東方へ櫛田川が流れ、また台高（だいこう）山脈の経ヶ峰付近に発する吉野川は、和歌山県に入って紀ノ川と名を変え、西方に流れて紀淡海峡に注ぐ。この中央構造線に沿う一帯には、金・銀・銅・鉄や水銀など、貴重な鉱物資源が豊富に分布することが古くから知られていた。

『宇治拾遺物語』巻二の第四話に「金峯山薄打（きんぷせん）ちの事」として、金峯山の山崩れした場所で金が見つかったことを記している。また大峯山上に所在する大峯山寺本堂の解体修理に際し、昭和五十九年八月二十二日～十月二十四日に、奈良県立橿原考古学研究所により本堂内の発掘調査が実施され、二体の黄金仏（阿弥陀如来坐像と菩薩像）が出土したことは記憶に新しい。

『古事記』や『日本書紀』に、宇陀は神武伝承の主舞台として語り継がれており、その歴史的背景が注目される。『古事記』の神武伝承では、神武の一行は熊野から熊野川沿いを遡り、奈良県五條市付近へ出、そこから吉野川、さらにその支流の高見川を遡って東吉野村に入り、佐倉峠を越えて宇陀に入ったとする。神武の一行が吉野川の河尻から上流に至った際、「尾ある人、井より出で来、その井光れり」との記述がみえる。名を問うと、「僕（やつがれ）は国つ神、名は井氷鹿（いひか）」と答えた。井より出てきた尾ある人（生尾（せいび））とは、吉野川沿いの地に所在した天然の水銀（硫化水銀）を採取していた人々である可能性が大きい。

かつて宇陀市菟田野大沢に水銀鉱山があって、明治四十二年から本格的に採掘されるようになった。「大和水銀鋼業所概要」によれば、昭和三十年九月に至り、新たに大和水銀鋼業所（大和金属鋼業株式会社）が設立され、昭和三十四年下期（十月～三月）には、出鋼量五三一二・七トン、生産水銀量一三〇二〇キログラムにも達している。しかし昭和三十八年に芳野川で水銀公害が発生したため、工場は閉鎖されて北海道に移転した。その跡地がし

ばらく奈良県の施設となっていた折、一度、訪ねて旧坑内を見学したことがある。旧坑内から、奈良時代に遡る仏像・装身具・松根などが発見されており、奈良時代にはすでに水銀鉱床の採掘が行なわれていたことが明らかである。

阿騎野歌の背景

まず阿騎野歌についてふれよう。

軽皇子の安騎の野に宿りし時に、柿本朝臣人麻呂の作りし歌

やすみしし　わが大君　高照らす　日の皇子　神ながら　神さびせすと　太敷かす　京を置きて　こもりくの　泊瀬の山は　真木立つ　荒き山道を　岩が根　禁樹押しなべ　坂鳥の　朝越えまして　玉かぎる　夕さり来れば　み雪降る　安騎の大野に　はたすすき　小竹を押しなべ　草枕　旅宿りせす　古思ひて

（巻一―四五）

短　歌

安騎の野に宿る旅人うちなびきいも寝らめやも古思ふに

（巻一―四六）

ま草刈る荒野にはあれど黄葉の過ぎにし君が形見とぞ来し

（巻一―四七）

東の野にかぎろひの立つ見えてかへり見すれば月かたぶきぬ

（巻一―四八）

日並の皇子の尊の馬並めてみ狩立たしし時は来向かふ

（巻一―四九）

詞書に「軽皇子」とみえ、また長歌では軽皇子を「やすみししわご大君　高照らす　日の皇子」と讃える。後にもふれるように、柿本朝臣人麻呂らが軽皇子（六八七―七〇七）を伴って宇陀の安騎野へ赴いたのは、持統六年（六九二）十一月十六日のことであり、翌十七日の夜明け前に、東の空に「かぎろひ」の立つのを見たと推定されるが、その時点では「軽王」であって「軽皇子」ではなかった。その背景については後に言及する。長歌では、軽皇子が柿本朝臣人麻呂らに伴われて安騎の大野に至り、「いにしへ」を偲び、旗すすきや小竹を押し伏せて「旅宿り」したと歌う。後のことになるが、軽皇子は持統十一年（六九七）二月に立太子し、祖母である持統天皇が同年八月一日に退位すると、同日に即位したから、安騎野へ赴いた際には、わずか十一才にすぎなかった。

四六番歌では、軽皇子や付き従った柿本朝臣人麻呂らは旅宿し

たとするが、厳寒期でもあり問題を残す。人麻呂らが古を思って、なかなか眠りにつけなかったのは、天武九年（六八〇）三月二十三日に天武天皇が菟田の吾城へ行幸した際、軽皇子の父、草壁皇子も同行しており、舎人らは往時を偲んで眠れずにいたのであった。草壁皇子尊が持統三年（六八九）四月十三日に薨じた際、嶋宮の舎人たちは挽歌を歌っているが、巻二―一九一では「けころもを時かたまけて出でましし宇陀の大野は思ほえむかも」とみえている。

往時の行宮がまだ残っていたかもしれない。往時を偲んで安騎の大野で野営したとするが、歌人としての人麻呂の創作だった可能性もある。事実をそのまま歌うのではなく、想像を膨らませ、より文学性豊かに表現するのが歌だからである。そして人麻呂らは翌日の夜明け前に、東の空に「かぎろひ」の立つのを見た。

天武天皇が菟田の吾城へ行幸したのは、天武九年三月二十三日で晩春のことだったから、「かぎろひ」は起こるべくもなかった。それだけに軽皇子や人麻呂らが、安騎の大野で「かぎろひ」の立つのを見た折の感動はいかばかりであったか、想像に難くない。人麻呂らは飛鳥へ戻って人々に語り、軽皇子も祖母の持統天皇に話したかとも思われる。

飛鳥浄御原宮から、宇陀の安騎の大野に至る道筋を検討しておこう。巻一―四五では、飛鳥から泊瀬の荒山道を登り、坂を下って安騎の大野へ至ったと歌っている。この道筋をもう少し詳しく分析すると、柿本朝臣人麻呂らは飛鳥から泊瀬谷に入り、山越えをして宇陀の安騎の大野に至ったと推定できる。

『新訂 大宇陀町史』に関わっていた折、大宇陀町在住の故老の方々から、往時のことをいろいろ伺う機会があった。その折、春先に大宇陀から長谷寺へ参詣する道筋として、野依（のより）、口今井（くちいまい）、笠間（かさま）をへて、狛川（こまがわ）沿いを下ったと伺った。鉄道が敷設される以前においては、狛川沿いの道を取るのが最も捷路とされていたのである。

右の指摘を踏まえると、柿本朝臣人麻呂らは軽皇子を伴い、馬に乗り飛鳥から阿倍山田道を取って泊瀬谷に入り、狛川沿いの道を上って、笠間から口今井、野依をへて、菟田の吾城に至ったと推定しうる。

飛鳥から大宇陀に至る道筋は、他にもいくつか存在する。例えば飛鳥から、八釣（やつり）、高家（たいえ）、今井谷、下（しも）、倉橋、忍坂（おっさか）、粟原（おうばら）、半坂（はんさか）、野依をへて、大宇陀に至る道筋も想定できる。しかし急坂が多く、かなりの時間を要する。やはり右にみた道筋が捷路であろう。

時代は遡るが、推古十九年（六一一）五月五日に菟田野で、わが国最初の薬猟（くすりがり）[1]が行なわれたが、その際にも右の道筋を取った可能性がある。

同日、諸臣らは、まだ暗い鶏鳴の時に「藤原の池」の辺に集まり、會明（夜明け）に出発した。この日の諸臣の服の色は、全て

冠の色と同じで、各々、冠や髪に飾り（髻花）を刺し、大徳・小徳の冠位にある者は金の髻花、大仁・小仁は豹の尾、大徳以下の者は鳥の尾を用いたとみえ、まことに華麗な騎馬集団であった。

『日本書紀』によれば、藤原の池は推古十五年（六〇七）の冬に掘られた池で、「藤原」の地名から明日香村小原付近に所在した池かと推測される。

推古十九年五月五日の夏至の日に、男性官人らは馬に乗って菟田野へ赴き、薬猟を行なって鹿を狩り、その若角を取ったことは確実である。

天武九年（六八〇）三月二十三日、天武天皇は菟田の吾城に行幸した。その際、草壁皇子も同行していたことは、後に嶋宮の舎人たちが草壁皇子尊の死を悼んだ挽歌に、「けころもを時かたまけて出でましし宇陀の大野は思ほえむかも」（巻二―一九一）とみえるので、確実である。

天武天皇の菟田の吾城への行幸は、天武九年の晩春のことであったから、「かぎろひ」が立つことはあり得ない。「かぎろひ」は放射冷却の生じる冬の夜明け前に、東の空が紅に染まる現象で、その後、一端、暗くなり、それからしばらくして夜明けとなる。「かぎろひ」を、夜明けに東の空が紅に染まる現象とする向きが多いが、以下にふれるように、それは大きな誤りである。

「かぎろひ」について

これまでの「かぎろひ」についての議論には、いくつか問題があるように思われる。

『古事記』の履中段に、イザホワケ王（後の履中天皇）が難波宮で大嘗（新嘗祭）を行なった後、酒を飲んで寝込んでいたところ、弟の墨江中王が大殿に火を放ち、天皇を殺そうとした。それで倭漢直の祖、阿知直は密かにイザホワケ王を馬に乗せて大和に向かう。多遅比野に到ってイザホワケ王は目覚め、阿知直に居場所を問うと、墨江中王が難波宮に火を放ったので、大和に逃れる途中だと答えた。そこでイザホワケ王は、「丹比野に　寝むと知りせば　防薦も　持ちて来ましもの　寝むと知りせば」と歌った。

また波邇布坂に到って西方の難波宮を望むと、まだ盛んに燃えているので、イザホワケ王は、「波邇布坂　我が立ち見れば　かぎろひの　燃ゆる家群　妻があたり」と歌った。ここにみえる「かぎろひ」は、春先の野に立つ「かげろう」のように、まだ火が燃え盛っている意であって、「かぎろひ」ではない。後にもふれるが、「かぎろひ」は厳寒の夜明け前に、東の空が紅に染まり、さらにオーロラの如く様々の色の筋が舞う現象である。研究者の間でも、「かぎろひ」と「かげろう」の混同が見られる。

宇陀市大宇陀町迫間に大宇陀地域事務所（旧大宇陀町役場）が

あり、そのすぐ西方に広がる小高い丘は「かぎろひの丘 万葉公園」となっている。かつて「長山（ながやま）」と称された丘陵で、近世前期には織田藩の藩邸があった。丘陵の上には、佐々木信綱揮毫の大きな万葉歌碑があり、柿本人麻呂の「かぎろひの歌」が刻まれている。

四周を眺めると、東南から南西方向にかけては低い山々が連なり、すぐ西北には小高い西山が峙つ。西の彼方には、北から南へ音羽山（標高八五一・七メートル）、経ヶ塚山（〃八八九メートル）、熊ヶ岳（〃九〇四メートル）と高い山々が連なっており、桜井市との境となっている。長山に立って夕陽を眺めると、まことに荘厳。いにしへの阿騎野の地であることを実感する。

少し問題となるのは、長山の直ぐ東方、大宇陀町大字春日に所在する古城山（こじょうやま）（城山・秋山城とも。標高四七三メートル）である。天文（一五三二―一五五五）～永禄（一五五八―一五七〇）年間に、秋山氏により頂上に中世山城「秋山城」が築かれた。今も天主台・二の丸・三の丸・石垣・堀切などの遺構を留めており、近年、発掘調査が進められている。慶長五年（一六〇〇）に入部した福島孝治は、秋山城を松山城と改名した。元和元年（一六一五）、福島孝治の改易に伴い松山城は破却され、織田信雄が入部し、長山に館を置いたが、元禄八年（一六九五）の「宇陀崩れ」により改易、兵庫県の柏原（かいばら）に移った。その後、大宇陀は幕府直轄領（天領）となり、以後、大いに栄えるようになったのである。

長山の標高は三八四・五メートルで、古城山のそれに比し九〇メートルほど低い。そのため長山に立つと、すぐ東の古城山に遮られて、その彼方は全く見えない。先にふれたように、東南から南西方向は遠くまで望むことができる。『万葉集』巻一の四八番歌では、「東の野にかぎろひの立つ見えて」と歌っているが、長山に立つと「東の野」を望むことは出来ない。「かぎろひを見る会」は長山で催されており、長山からだと東南方向の山々の上に「かぎろひ」が立つ。「かへり見すれば月かたぶきぬ」は、西方の音羽山から熊ヶ岳に続く稜線近くに月が傾くことを歌う。

そうしたことを勘案すると、柿本人麻呂らが「かぎろひ」を見た場所は、私見では、長山から西南西へ約一キロメートルの大宇陀本郷付近（後藤又兵衛ゆかりの「又兵衛桜」の近く）がもっとも相応しいように思う。標高は長山とそれほど変わらないが、東方はるか彼方まで見通すことができる。「東の野にかぎろひの立つ」壮大な景観を、心行くまで見ることが出来る絶好の場所と言えよう。本郷の地からだと、西の彼方に傾く月も見える。

壁画「阿騎野の朝」

現在、宇陀市大宇陀の中央公民館に、故 中山正實（まさみ）画伯の描かれた壁画「阿騎野の朝」が所蔵されており、申し出れば見学できる。

高さ七尺五寸（二・三メートル）、横幅十五尺（四・五メートル）の大作である。

もともと「阿騎野の朝」は、紀元二六〇〇年（一九四〇）の記念事業として、同年十一月十八日に橿原市畝傍町に建設された大和国史館に、朝倉文夫の「和気清麻呂像」と共に飾られていたものである。昭和二十四年七月十二日に、大和国史館は大和歴史館と改称された。その後、大和歴史館は長らく維持されてきたが、老朽化のため、すぐ西北に新たに奈良県立橿原考古学研究所附属博物館が建てられ、平成四年九月十日、大和歴史館の跡地に現在の奈良県立橿原考古学研究所が建設された。大和歴史館が撤収されるに際し、壁画「阿騎野の朝」は大宇陀町に（当時は宇陀郡大宇陀町）、「和気清麻呂像」は岡山県和気町に寄贈された経緯がある。この壁画が大和歴史館にあった頃から、また大宇陀町の中央公民館に移されてからも、私は何度となく見ているので、以下、全体の構成と気づいたところを述べる。

壁画の中央に白馬に跨がった人物を描く。柿本人麻呂とみてよい。背景には低い山並みが描かれ、山際を薄赤く染めており、東方を描いている。右端の高い三角形状の山は、大和と伊勢との境を成す高見山（たかみやま）だろう。したがって馬上の人麻呂は、東方の山々を背後にして、西の空に傾く月を見ているとみてよい。

人麻呂のすぐ右手後ろには、座りこんで焚火する三人の男性を印象的に描く。人麻呂の背後に、四、五人の馬に乗った人物を描き、その内の一人は左手に鷹を据える。そのほか馬を引く者三、四人、従者と思しき者、おおよそ十四、五人が描かれている。軽皇子らしき人物はよくわからないが、人麻呂の左手背後に白い小馬に乗った人物がみえ、集団の内にあって唯一人、東の空を見ている。十一歳には見えないが、あるいは軽皇子かもしれない。

問題なのは夜明けの空を描いていて、「かぎろひ」ではないことだろう。中山画伯がこの壁画を描かれた時点では、「かぎろひ」がまだ十分に認識されていなかったのでは、と思われる。

壁画「阿騎野の朝」の製作者である中山画伯について、また描かれた絵画についても、私はほとんど知るところはないが、一、二、気づいたところを述べる。

私は京都大学大学院博士課程在学中から、京都教育大学に赴任してからも、十二、三年にわたり、天理大学へ非常勤講師として出講していた。そして天理大学附属図書館を随分と利用させていただいたことに深く感謝している。書庫に入って、数多（あまた）有る書籍を自由に閲覧し、必要な書物を借り出すことが出来た。論文「薬猟と本草集注―日本古代における道教的信仰の実態―」[2]を執筆できたのも、書庫で見つけた岡西為人氏の労作『本草経集注　縮刷影印版』に依るところが大きい。

附属図書館を利用している内に、閲覧室の壁の一画に油絵の小

品があって、それが中山画伯の「阿騎野の朝」と全く同じ構図であることに気づいた。この油絵が原画で、これをもとに壁画「阿騎野の朝」が描かれたと確信したのである。本稿執筆中に、天理市に住む奈良高校時代の友人に依頼して、彼の親しい同館の司書の方に確認してもらったところ、今も閲覧室に懸かっているとのこと。なぜ天理大学附属図書館に中山画伯の油絵があるのか知る由もないが、あるいは天理教第二代真柱（しんばしら）の中山正善氏の縁戚だったのでは、とも思ったりしている。十年ほど前には、中山画伯の令夫人が神戸にお住まいだということを、天理大学の関係者からうかがったこともあった。

中山正實画伯は、柿本人麻呂らが軽皇子を伴って阿騎野に赴き、「かぎろひ」を見た日時や場所を究明し、それをもとに「阿騎野の朝」を描かれたのである。それに先立って中山画伯は、中央気象台（現、東京天文台）の辻 光之助技師と寺田勢造技師に、「かぎろひ」が立ち、月が西方の山に傾く日時の算出を依頼された。その結果、持統六年（六九二）十一月十七日の午前五時五十分と算出されたのである。大宇陀町から刊行されたパンフレット「かぎろい（かぎろひ）に寄せて」は、『天文月報』第七巻第九号（一九七七年九月）に依拠した内容であり、また他にも言及がある。[3]

中山正實画伯の「阿騎野の朝」は、その成果を踏まえて描かれたものであったが、先にもふれた如く、「かぎろひ」ではなく「夜明け」の光景である。当時、「かぎろひ」については、まだ十分に理解されていなかったとみてよい。

持統六年（六九二）十一月十六日に、柿本人麻呂らが軽皇子を伴って阿騎野に赴き、翌十七日の夜明け前、午前五時五十分に東の空に「かぎろひ」の立つのを見たとの推定は、今日ではほぼ通説となっている。

しかし私は、もう少し深めるべき所があるのでは、と考えている。その切っ掛けとなったのは、平成二十三年（二〇〇一）十二月十一日の早朝、第四十回の「かぎろひを観る会」に参加した折に浮かんだ疑念からである。「かぎろひを観る会」は、かつて中央気象台によって算出された旧暦の「持統六年十一月十七日午前五時五十分」に基づき、今日まで続けられている。第四十回の十二月十一日は、旧暦の十一月十七日に当たっていた。

記憶されている方も多いと思うが、前日の平成二十三年十二月十日は、珍しく皆既月食に当たっていた。午後九時四十五分に月が欠け始め、同十一時五分からは完全に欠けた状態が約五十分続き、満月に戻ったのは、翌十二月十一日の午前二時半頃であった。そして午前四時頃から、「かぎろひの丘」では、いろいろな行事が始まったのである。

全く偶然のことであるが、皆既月食があったことによって考えることがあった。先にもふれたが、かつて中央気象台では、柿本

人麻呂らが「かぎろひ」の立つのを見た時刻を、持統六年十一月十七日午前五時五十分と算出されているが、これは近代になってからの計算法、すなわち午前零時を以て日付が替わることに基づくものではないだろうか。

周知の如く近代以前にあっては、夜明け前後に日付が替わった。よく知られているように、赤穂義士による吉良邸討ち入りは、歴史年表などでは元禄十五年（一七〇二）十二月十四日のこととされているが、厳密に言えば十五日の早朝のことであった。泉岳寺に引き上げる頃に夜明けとなり、十四日から十五日に替わったのである。中央気象台（現、東京天文台）による算出は、午前零時を以て日付が替わることをもとに、持統六年十一月十七日午前五時五十分とされたのでは、と憶測する。阿騎野で「かぎろひ」が見られたのは、十六日の午前五時五十分頃で、その後、一端、暗くなり、夜明けとなって日付が替わり、十一月十七日となったとみるべきでは、と考える。近代以前にあっては、夜明け前後に日付が替わったことに留意すべきだろう。

軽皇子と日並皇子尊

それでは「阿騎野歌」が成立した時期は何時だろうか。阿騎野歌の前には、持統六年（六八二）三月の伊勢行幸に関わる歌群があり（巻一―四〇～四四）、続いて「藤原宮の役の民の作れる歌」（巻一―五〇）、志貴皇子の「明日香風の歌」（巻一―五一）、「藤原宮の御井の歌」（巻一―五二・五三）と続く。したがって阿騎野歌の成立時期は、持統天皇の伊勢行幸から藤原宮造営の最終段階までの間とみてよい。柿本人麻呂らが阿騎野で「かぎろひ」を見た日時は、右にみたように持統六年十一月十六日の夜明け前のことであったから、それ以降のことであり、藤原宮へ遷った持統八年十二月までの期間に絞られる。

手がかりとなるのは、「阿騎野歌」において、詞書きに「軽皇子」と記し、また長歌の中で軽皇子を「やすみしし　わが大君　高照らす　日の皇子」、短歌では「軽皇子」の父、天武朝の皇太子であった草壁皇子を「日並の皇子の尊」と讃えていることが注目される。

『万葉集　各句索引』（塙書房）によれば、『万葉集』には、「やすみしし　わが大君」と記す事例が七首、「やすみしし　わが大君の」事例が六首、やすみしし　わご大君の」事例が十一首、「やすみしし　わご大君」の事例が二首みえている。天皇に関わる事例が多いが、軽皇子（巻一―四五）、弓削皇子（巻二―二〇四）、長皇子（巻三―二三九）、高市皇子（巻二―一九九）についても、「やすみしし　わが大君」が冠されており、とりわけ軽皇子の事例が注目される。

軽皇子は草壁皇子の子であったから、柿本人麻呂らに導かれて阿騎野に赴いた際には、「軽王」であった。草壁皇子については、天武十年（六八一）二月二十五日条に、「草壁皇子尊を立てて皇太子とす。因って萬機を摂めしめたまふ」とみえ、また持統三年（六八九）四月十三日条には、「皇太子草壁皇子尊、薨りましぬ」と記す。

阿騎野歌が成立した時点で、草壁皇子尊は限りなく天皇に近い存在、すなわち「日並の皇子の尊」とされ、その子の軽王は軽皇子と称されるようになったと考えられる。

柿本人麻呂らが軽王を同道し阿騎野で「かぎろひ」を見た事実は、きわめて政治性を帯びるようになったのである。「かぎろひ」は、厳寒期の晴れた夜明け前に、東方の空が紅に染まる壮麗な現象である。その後、一旦、闇となり、やがて夜明けとなる。奈良県下では、大宇陀の地は都祁の針（奈良市都祁町）に次いで年平均気温が最も低く、地形的にも「かぎろひ」が生じやすい所である。

柿本人麻呂らに伴われた軽王が阿騎野で「かぎろひ」を見たことが契機となり、年少ではあったが日並皇子尊の子として、その存在が大きくクローズ・アップされて軽皇子と称され、太政大臣の高市皇子に匹敵する存在となったのである。持統十年（六九六）七月十日、後皇子尊（高市皇子）が薨じ、軽皇子は持統十一年（六九七）二月に皇太子となり、八月一日に十五才で即位した。文武天皇である。「かぎろひ」の立つ現象が限りなく祥瑞に近いものとされ、それを眼にした軽王は軽皇子と称されるに至り、後皇子尊薨去後、皇太子に立てられ、持統天皇の退位に際し、文武天皇として即位したと推測する。

後皇子尊の薨去と軽皇子の立太子については、検討すべきことが残るが、紙幅も尽きたので別の機会に再論したく思う。

註

(1) 薬獵については、拙稿「薬獵と本草集注―日本古代における道教的信仰の実態―」を参照されたい。和田　萃著『日本古代の儀礼と祭祀・信仰　中』所収、塙書房、一九九五年。

(2) 註(1)に同じ。

(3) 沢瀉久孝『萬葉集注釋　巻第一』の三二六頁にも、言及がある。